

(三) 大唐神都青龍寺故三朝の國師灌頂の阿闍梨惠果和尚の碑

日本國學法の弟子苾芻空海文を撰ぶ

城中ヲ歴テ名徳ヲ訪フニ、偶然トシテ青龍寺東院ノ和尚、法ノ諱ハ惠果阿闍梨ニ遇ヒ奉ル。

空海、西明寺ノ志明談勝法師等五六人ト同ジク往ヒテ和尚ニ見ユ。和尚忽チ見テ笑ヲ含ミ、喜歡シテ告ゲテ言ワク。我先ヨリ汝ガ来レルコトヲ知リテ、相待ツコト久シ。今相見ユルコト大ヒニ好シ、大ヒニ好シ。報命竭キナント欲スルニ付法ニ人ナシ。

必ズ須ク速カニ香花ヲ弁ジテ、灌頂壇ニ入ルベシト。

六月上旬ニ学法灌頂壇ニ入ル。是ノ日大悲胎藏ノ大曼陀羅ニ臨ミ法ニ依リテ花ヲ抛ツニ、偶然トシテ中台毘盧遮那如来ノ身上ニ着ク。

五部灌頂ニ沐シ、三密加持ヲ受ク。是ヨリ以後胎藏ノ梵字儀軌ヲ受ケ、諸尊ノ瑜伽觀智ヲ学ス。

七月上旬二更ニ金剛界ノ大曼荼羅ニ臨ミ、重ネテ五部灌頂ヲ受ク。亦抛ツニ毘盧遮那ヲ得タリ。和尚驚嘆シタマフコト前ノ如シ。八月上旬ニモ亦伝法阿闍梨位ノ灌頂ヲ受ク。是ノ日五百ノ僧齋ヲ設ケ、普ク四衆ヲ供ス。青龍大興善寺等ノ供奉大徳等、並ビテ齋筵ニ臨ミ、悉ク皆隨喜ス。『金剛頂瑜伽』五部真言密契相續ヒテ受ケ、梵字梵讚間モテ是ヲ学ス。

宣シク是ノ兩部大曼荼羅、一百余部ノ金剛乗ノ法、及ビ三藏転付ノ物、並ビニ供養ノ具等、本郷ニ歸リテ海内ニ流伝センコトヲ請フ。纔ニ汝方来レルヲ見テ、命ノ足ラザルヲ恐レヌ。今即チ授法ノ在ルアリ。経像ノ功畢ンヌ。早ク郷国ニ歸リ、以テ国家ニ奉ジ、天下ニ流布シテ、蒼生ノ福ヲ増セ。然レバ則チ四海泰ク万人樂シマン。是則チ仏恩ヲ報ジ師徳ヲ報ズ。国ノ為ニハ忠ナリ、家ニ於テハ孝ナリ。義明供奉ハ此処ニシテ伝ヘン。汝ハ其レ行キテ、是ヲ東国ニ伝ヘヨ。努力、努力。（「請来目錄」）

青龍寺は、西明寺とは正反対の方角、東側の城壁南門の「延興門」の目の前、左街の最東辺、新昌坊南門の東の高台にあった。当時は参詣者も多くにぎやかな密教寺院であったらしい。

隋の文帝によって五八二年に「靈感寺」として創建された。唐代の初期には戦乱のため一時廃寺になったが、高宗の時に先帝太宗の娘城陽公主が病に倒れ、法朗という密教僧（三

論宗の法朗ではない)が真言を唱えると靈験があり公主の奏上により再興されて「観音寺」となった。その後睿宗の七一一年、改名されて「青龍寺」といわれるようになった。

惠果の時代までは密教寺院だった形跡はないが、惠果のほか惠応、惠則、惟尚、弁弘、惠日、義満、義明、義照、義操、義愍、さらにその弟子らの高僧が輩出し、平安時代に入唐した留学僧八人(最澄、空海、常暁、円行、円仁、惠運、円珍、宗叡)のうち六人を教えた。そのうち義操は空海と並ぶ正嫡で、さらに日本僧とは大變縁が深く、円行・円仁・円載・円珍・宗叡らはその高弟の義真や法全から金胎の大法を受法している。惠果が衣鉢を託した義明は不運にも若くして没している。

しかし、八四五年に武宗が強行した「会昌の廃仏」は西明寺を含む四カ寺を残し九十を超える仏教寺院をことごとく破壊し、青龍寺もまた容赦ない法難に遭った。幸い、翌年「護国寺」として復興し、八五五年にはもとの青龍寺と呼ばれるようになった。この年円珍が長安に入り、青龍寺で法全に師事している。

惠果(七四六〜八〇五)は、幼少時に出家し当初から青龍寺に入り聖仏院の曇貞を師とする。その後不空に師事し、二十才で「具足戒」を受け『金剛頂経』系の密法を受法した。二年後、善無畏門下の玄超から『大日経』系の法を授かった。三十才の七五五年、青龍寺東塔院に灌頂道場を下賜され、宮中内道場の護持僧に任じられた。七八九年には日照りに

際し請雨法を修し徳宗の帰依を受けた。八〇二年病をえて愛弟子義明に後事を託し、八〇四年般若三蔵の醴泉寺に金剛界曼荼羅を造り、般若ほか諸大徳が法筵に随喜した。その時請雨を修しその功蹟があつたという。

最晩年の八〇五年空海とめぐり合い、義明とともに空海に金胎兩部の大法を授け、そのほか五十種からの諸尊念誦法を伝授し、曼荼羅・密法具・付嘱物を与えた。同年十二月十五日に、東塔院で示寂した。遺骸は場外の龍原にある不空の塔の側に埋葬された。弟子を代表して空海がその碑文を撰した（「大唐神都青龍寺故三朝国師灌頂阿闍梨惠果和尚之碑」）。

さて空海は、般若の助言に従い、延暦二十四年（八〇五）六月十二日、西明寺で親しくなつた志明・談勝らとともに青龍寺東塔院に惠果和尚をたずねた。この時期までに空海の梵語力は相当のレベルに達し、華嚴經と華嚴思想の本場の解釈も身につけ、『大日經』も「具緣品」以降も学解ではほぼ掌中に収め、命がけの渡唐の目的はほぼ達成していたといつていい。ただ、般若の言う兩部の大經は會得するもの、密教とはそういうもの、という真意がよくわからないので、そのこともあつて惠果に会い『大日經』の密教的な受法が叶うかどうかだけでも聞いてみたかったのである。

幸い、その日空海は惠果に會えた。見るからに病弱の氣配がありありの老師であつたが空海を見るや否やいきなり「君が長安に来てゐることは知つていた。いつ来るかとずいぶ

ん待ったものだ」と喜んだ。おそらく、情報源は般若三歳であったろう。般若が空海の異能を一番早くまた最も濃密に見抜いていた。それをすぐ恵果に伝え、恵果の正嫡候補として推薦していたと思われる。般若は恵果の最期が近いことを察していた。さらに恵果に千を超える弟子がいても、そのうち両部の大法を授けた高弟が何人かいても、まだ正嫡に値する機根の弟子には恵まれていないことが恵果の懊悩であることもよく承知していた。

恵果は空海の尋常でない機根を般若から聞いて、ほぼ正嫡に値する法器であると心に期してはいた。般若によれば、空海のとくにサンスクリットの語学力が抜群であるという。例えば、金胎両部の念誦法にしる、諸尊供養法にしる、行法のなかの真言はそれを聴いた瞬間にほぼ、サンスクリットそのものの意味が、あるいは唐語や和語への訳語変換が、わかるというほどにある。そのレベルにしてはじめて密法は正しく伝わるのである。そこそが伝法の本来的な実体である。般若が空海を恵果の待ちわびる正嫡候補として推薦する主因はそこにあつたにちがいない。

空海に直接接した恵果は、般若の推薦が誤りでないことをすぐ悟った。即座に灌頂を授けようと言い出した。空海はその意味を計りかねた。空海にはそこまで密教というものがわかつていなかった。空海にわかる密教とは山岳修行レベルの雑密と『大日経』の学解だけであった。空海は恵果の真意を恐る恐る聞いたであらう。恵果は苦笑しながら、恵果を今最高の依止師とする「金胎不二」の密教の奥義を諄々と説いた。ここではじめて空海は

仏教思想の最新バージョンを知った。教理的には華嚴の理解が役に立った。奈良で学んだ三論（中観）や法相（唯識）も大いに役立った。しかし恵果の密教はそれら大乘を大きく超えていた。

恵果の話聞き、釈尊の仏教から密教までの全仏教史が「無執著」「無我」「空」「縁起」「法性」「仏性」「本覚」「諸法実相」「法界」「法身」「生仏一如」「菩提心」「速疾成仏」という、一連の教理概念の連鎖として空海の腑に落ちた。だからその瞬間、ここで恵果の勧めに従い金胎兩部の大法を受法することがとりもなおさず仏道をえらんだ自分を全仏教史のなかに投帰することであり、この望外のチャンスを逃す手はないと悟った。

空海は懇懇に、「密教の修行未履修の私が灌頂の壇に入っている、明日灌頂をやる」と聞いた。う。恵果は笑って「君の機根はすでにそれを越えている、明日灌頂をやる」と言った。同席した志明も談勝らも大いに喜んだ。一番喜んだのはむしろ恵果だった。空海はすぐ般若にこのことを伝えた。般若は懇切に灌頂受者の心得から準備するもの、さらにこれから必要な修学について細かな助言をしてくれた。

翌六月十三日、空海は胎藏界の「受明灌頂」（「学法灌頂」）を受け、七月上旬に金剛界の「受明灌頂」を受けた。「受明灌頂」とは、密教を受持しこれを学ばんとする者に弟子の資格を与えるいわば略式の灌頂である。とはいえ、灌頂の秘儀で一番に重要な「投華得仏」とその結果結縁した曼荼羅中の一尊の秘印（最極秘の印）・秘明（最極秘の真言）

の授受は行う。

「投華得仏」とは、道場に引入され覆面（目かくし）をされた受法者が、手に「普賢三昧耶」の印を結び、口にその真言（「オン サンマヤ サトヴァン」）を唱えつつ、教授の僧に伴われて曼荼羅壇（灌頂壇）に進み、両手中指の間の先端に「華（五房が一本の茎についた櫛の葉）」をはさみ、大壇の上に敷かれた「敷曼荼羅」の上に投げ落し（「投華」）、「華」が落ちた曼荼羅の一尊と仏縁を結ぶ（「得仏」）儀礼をいう。空海は、六月の胎蔵界につづき七月の金剛界の時も「華」が曼荼羅中央の本尊大日如来に落ち恵果を驚嘆させた。恵果は空海の言語の異能のほかに奇瑞を起す靈威的氣質にも目を見張りながら、胎蔵界大日と金剛界大日それぞれの秘印と秘明を授けたに相違ない。

六月の胎蔵界「受明灌頂」のあと、空海は胎蔵界の梵字と儀軌の伝授を受けたという。つまり今でいう「胎蔵界念誦次第」であろう。これによって胎蔵界の三摩地法（念誦法）の練磨に入ったのである。空海はそれを一ヶ月ほど行った。そして七月の金剛界「受明灌頂」のあと、同じように「金剛界念誦次第」の伝授を受け、それによって金剛界三摩地法の練磨を重ねた。それもまた一ヶ月ほどである。

当時は、念誦法の「作法次第」（儀軌）を（当然ながら）筆写した。今は、印刷製本されたものを本山が用意しているので筆写の必要がない。何十種もの真言を書き写しその意

味を理解するのには、梵字・悉曇つまりはサンスクリットに通じていなければ書写している字も意味もわからない。空海は、それを相当にマスターできていたため、筆写も実際の行もまちがわずにできたはずである。一ヶ月程度という短い期間であったのは、もちろん恵果が体調を考慮して急いだことでもあるが、空海がすでに三摩地法の修行に必要な素養を十分に具えていたからにほかならない。

恵果は胎藏・金剛両界の三摩地法の熟達ぶりを見届け、間を置かず八月十日、空海のために阿闍梨位に上る「伝法灌頂」を行った。

先ず、空海は三昧耶戒道場に引入され、壁代（布の囲い）のなかの高座に坐す師恵果の御前に進み、仏性戒（「四重（禁）戒」「十無尽戒」そして「三昧耶戒」）を受けた。

次いで、胎藏界の灌頂道場に引入され、覆面（目かくし）をされ、「普賢三昧耶」の印を手に結び、その真言「オン サンマヤ サトヴァン」を口に唱え、曼荼羅壇の側まで進み、そこで「投華得仏」した。さらに恵果の待つ「小壇所」に入り恵果から「五瓶」の水を頭上に注がれた。これが文字通りの灌頂である。そして灌頂の秘儀中の秘儀である秘印と秘明の口授に移った。空海は宝冠を頭にかぶせられ、胎藏界大日如来の秘印と秘明を授かった。

同じ日つづけて金剛界の灌頂が行われ、空海は胎藏界と同様の流れで金剛界大日如来の秘印と秘明を授かった。

灌頂の秘儀中受者の空海は恵果阿闍梨に従い滞りなく印を結び真言を唱え、いくつもの作法所作を違えることはなかった。六月上旬から八月上旬までの両部念誦法練磨の賜物であった。

「請求目録」の当該記述では、

『金剛頂瑜伽』、五部真言、密契、相續ヒテ受ケ

とだけあるので、この時の「伝法灌頂」は金剛界のみであったやに読めるが、空海のための「伝法灌頂」はまさに金胎両部の受法であったことは義明と並んで付法の誉れに浴したことから明らかである。

空海は、一介の私費留学生から一躍阿闍梨の師位をえて、真言付法の第八祖「遍照金剛」となった。空海がこれまで積み重ねてきたすべてが一気にそして速疾に結実したのである。般若は、空海の晴れの姿を称え、何度も「めでたし、めでたし」と言ったであろう。しかし、恵果のもとで何年も修行を積みながら未だ灌頂に浴しない者や、「受明灌頂」の段階で止まっている者や、「伝法灌頂」も金・胎いづれか片方しか受法していない者が大半であったから、ついきのう恵果のもとにきた空海が多く弟子を飛び越えるこの大抜擢には

山内に不平不満も出たであろう。惠果はかまわず供奉丹青博士の李眞や供奉鑄博士の楊忠信を呼び、曼荼羅や密法具の製作を命じ、不空から授かったものや自分の付嘱物を空海に与えた。そして「この法をすぐに日本に持ち帰りそれを弘めなさい、それが私への報恩になる」と諭した。空海の間からは感涙が溢れていたであろう。

秋にかけて、空海の日々は一変した。西明寺の居室を早朝に出て一日中青龍寺の惠果のもとで各種の伝授を受ける日がつづいたと思われる。この時期に、空海が入唐後おそらく最も渴望していた『大日経疏』の伝授があったのではないか。『大日経疏』は七二五年に善無畏三蔵が漢訳した『大日経』の註釈であり、善無畏が講じ弟子の一行がそれを筆受し註釈を加えた『大日経』理解のための必読のテキストである。しかも後の空海が独自の密教を構想するのに大変大きな論拠となった。真言宗の伝統では古来、能化（総本山の住持）が根拠のある所化（伝法灌頂ほかの大法を履修した阿闍梨位にある者）に伝授する習い（講伝）となっている。

空海は、この『大日経疏』をはじめ新訳の密典・儀軌・梵字真言讚を書写生に頼んで書写しはじめ、橘逸勢たちの手も借りて『四十華嚴』ほか修学の記録を書き留めることもはじめたであろう。詩文や書の書籍も集め、注文した絵図や法具のほか筆や墨に至るまで作らせ、日本に持ち帰る算段をはじめた。橘逸勢は「君は、国禁を犯してまですぐにでも帰るつもりなのか」といぶかったであろう。

空海は幸運というか、折りしも同じ第十六次遣唐使船団の僚船で東シナ海で遭難し那ノ津に引き返していた判官高階真人遠成率いる第四船が単独で渡唐し、朝貢のため長安に入っていることを聞いて知っていた。さらに鴻臚館に滞在中の判官に直接面会し、自分が奇跡的に受法したえ難き仏法を早く日本に持ち帰り国家のために役立てたいため、国禁を破つても判官とともに帰国したい旨を申し出（「本国ノ使ニ与ヘテ共ニ帰ルコトヲ請フ書」（『性靈集』））、いかに国家のために有益かを必死に説いたであろう。真人はこの国禁破りの尋常でない申し出に官吏として苦慮しながらも、事の重大さを理解し早速空海の帰国を唐朝に奏上し、ほどなくその許可が下りたのである。

貞元二十年（八〇四）、使ヲ遣シテ来朝ス。留学生橘免勢、学問僧空海。

元和元年（八〇六）、日本ノ国使判官高階真人上言ス。

前件ノ学生、芸業稍ヤ成リテ、本国ニ帰ランコトヲ願フ。

便チ臣ト同ジク帰ランコトヲ請フ。之ニ従フ。（『旧唐書』）

そうこうする間に、年末の十二月十五日、師恵果が自坊の東塔院で示寂した。空海はまさに、恵果の恵命が尽きるぎりぎりの時間に合つて師法をほぼすべて授受したのであった。恵果の遺骸は、翌年（大同元年（八〇六））正月十六日に埋葬された。

空海は師の埋葬を見届けると、「大唐神都青龍寺故三朝国師灌頂阿闍梨惠果和尚之碑」の碑文を残し帰国を急いだ。手配していた曼荼羅ほかの品々も皆できあがってきた。空海が長安を辞した日はわからないが、その年の四月にはもう浙江にいたことが判明していることから、二月中旬から下旬には長安を発っていたと思われる。

盛大な送別の宴が催されたという。醴泉寺の般若三蔵や牟尼室利そして靈仙、青龍寺の義明ら、西明寺の円照や志明や談勝をはじめ、長安の文芸界の著名人たち、書の師韓方明も出席したであろう。皆が空海の早い帰国を惜しんだ。

旅立ちの朝、長安城外の灞橋のたもとに空海との別れを惜しむ人が溢れていた。別れの最後に般若が柳の枝を空海の手渡し空海を抱擁しながら、「できることなら君といっしょに日本に渡りたいものだ」と言ったかと思う。七十をすでに越えた般若は老令を悔やみながら、日本に渡りたい願望をいつも空海に明かしていたのである。

●本文…俗之所貴者也五常 道之所重者也三明 惟忠惟孝 彫聲金版 其德如天 蓋藏石室乎 嘗試論之 不滅者也法 不墜者也人 其法誰覺 其人何在乎

書き下し…俗の貴ぶ所は五常にして道の重んずる所は三明なり。惟れ忠惟れ孝、聲を金

版に彫る。その徳天の如し。蓋ぞ石室に藏せんや。嘗試してこれを論ずるに、滅せざる

は法にして墜さざるは人なり。その法を誰か覺り、その人何に在らんや。

私訳…世間の人たちが貴しとするのは儒家が説く仁・義・礼・智・信の五常であり、仏道に励む人が重要とするのは宿命明・天眼明・漏尽明（三明）である。これは国家（君主）への忠誠、これは親への孝養と、その名声を金属の凸版に彫る。その徳は高きこと天の如くで石室になどどうして閉っておけようか。試みにこれを論ずれば、滅しないというのは（縁起生の）理法であり、それをだめにしないのが人である。その理法は誰が覺りその人はどこにいるだろう。

※註記1…五常は、儒家の思想が説く君子・民が守るべき徳目。仁・義・礼・智・信。

※註記2…道は、ここは仏道。

※註記3…三明は、仏教が説くサトリの智慧、六神通のうちの三神通。宿命明（自と他の

過去世の在り様を知る）・天眼明（自と他の未来世の在り様を知る）・漏尽明（自と他の現在の在り様を明らかにして煩惱が尽きること）。

※註記4・・聲は、名声。

※註記5・・金版は、書物の表紙や背に表題などを箔押しする際に使う、文字や図を彫刻した凸版のこと。

※註記6・・嘗試は、なめて試してみること。

※註記7・・墜は、だめにすること。ここでは、法（不滅の理）を守ること。

●本文・・爰有神都青龍寺東塔院大阿闍梨法諱惠果和尚者也 大師 拍掌法城之行崩
誕迹昭應之馬氏 天縱精粹 地治神靈 種惟鳳卵 苗而龍駒 高翔擇木 囂塵之網
不能羅之 師步占居 禪林之葩 實是卜食

書き下し・・爰こゝに神都しんとの青龍寺東塔院に、大阿闍梨ほうのいみなにして法諱ほいを惠果あみなる和尚あり。大師

法城こうほうの行崩こうほうに拍掌はくしょうし、迹あとを昭應しょうおうの馬氏うまに誕うまれる。天あまは精粹せいさいを縦ほいにし、地ちは神靈しんりやうを治やす。

種たねは惟ただれ鳳卵ほうらんにして、苗こゝろにして龍駒りゆうこまなり。高たかく翔とんで木きを擇えらび、囂塵きやうじんの網あみはこれこゝろを羅あす

ること能わず。師歩しほして居を占め、禪林ぜんりん之葩はなびらは實に是れ卜食うらはみす。

私訳…ここに、大唐の都の青龍寺東塔院に、(密教の)大阿闍梨にして出家名を惠果といふ和尚がおられた。偉大な師は、法城(青龍寺)の興廢に對しその興隆のために拍掌し、その出自は会昌畧の馬氏の生れである。天は混じり気がなく勝れたところを思いのままにし、地は神威を育て上げる。種姓は鳳の卵(勝れた生れ)であり、血統は龍のような駿馬である。空高く飛んで(俗世を離れ)止まる木(師)を選び、わずらわしい世間の網はこのことを網にかけて捕えることができない。師子(ライオン)が歩くようにして居住の場所を占め、密教の花びら(勝れていること)は卜食の結果吉凶の吉に従うようによろしきものに従う。

※註記1…神都は、唐の都長安のこと。

※註記2…東塔院は、惠果和尚の青龍寺における住坊。

※註記3…法諱は、出家名。

※註記4…拍掌は、密教の念誦作法の「拍掌」の意味にとる。魔を除き諸仏を歡喜せしめる、意。ここでは法城の興隆のための拍掌。

※註記5…法城は、仏法が堅固で諸悪を防御することを城に喩えて言う。

※註記6…行崩は、ここでは仏法が行われることと崩れること(興廢)。

※註記7・・迹は、足あと。ここでは出生地。

※註記8・・昭應は、地名で今の会昌県。江西省贛州市に位置する県。

※註記9・・馬氏は、氏族名。

※註記10・・精粹は、まじりけがない、選びぬかれた、すぐれた、の意。

※註記11・・冶は、陶冶。練り上げること、育成すること。

※註記12・・種は、種姓。

※註記13・・鳳卵は、鳳の卵⇨聖賢の生れの喩え。

※註記14・・苗は、ここでは血統。

※註記15・・龍駒は、龍のような速く動く馬、駿馬。

※註記16・・囂塵は、騒音と塵埃。わずらわしい俗世間。

※註記17・・師歩は、師子（獅子、ライオン）のように歩くこと。

※註記18・・禪林は、密教。

※註記19・・葩は、花びら。立派なこと、勝れていること。

※註記19・・ト食は、新嘗祭の献上米の田を決める際などに、亀の甲を焼いて占う時縦や横に裂ける筋。縦を吉とし横を凶とし、吉に従う。

●本文・・遂乃 就故諱大照禪師 々之事之其大德也 則大興善寺大廣智不空三藏乃入室也 昔髻亂之日 隨師見三藏 々々一目 驚異不已 竊告之曰 我之法教 汝其

興之也 既而 視之如父 撫之如母 指其妙蹟 教其密藏 大佛頂 大隨求 經耳
持心 普賢行 文殊讚 聞聲止口 年登救蟻 靈驗處多

書き下し…遂に乃ち、故の諱大照禪師に就き、之を師とし之に事えたり。其の大徳は則

ち大興善寺大廣智不空三蔵の入室なり。昔髻亂之日 師に隨いて三蔵に見ゆ。三蔵一目

して驚異すること已まず。竊に之に告げて曰く。我が法教、汝其れ之を興せ。既にして

之を視ること父の如く、之を撫るに母の如し。其の妙蹟を指して其の密藏を教えたり。

大佛頂、大隨求、耳を經て心に持す。普賢行、文殊讚、聲を聞いて口に止める。年救

蟻に登り、靈驗處に多し。

私訳…そうして、故大照禪師（曇貞和尚）に就いて禪師を師として仕えた。その大徳（曇貞和尚）は大興善寺の大廣智不空三蔵の弟子であった。昔、垂れ髪と間が抜け替る幼少の日に禪師のお供をして（不空）三蔵に会った。三蔵は一目見て驚き不思議がって已まなかつた。密かに恵果に告げて言うに、「私の密教の教えを、お前が盛んにせよ。すで

にしてそれを見るに父のようであり、それを撫でるに母のようである。その絶妙で奥深さを指し示してその密教を教えた。『梵字大仏頂真言』『大随求陀羅尼經』は耳を通して心に保持され（暗記され）、『普賢行願讚』『文殊讚法身礼』はその声を聞いて口に留める（暗誦する）。今本生譚の救蟻捨身の年令（十四・五歳）になり、神仏との感応は処々に多く見られる」。

※註記1…大照禪師は、不空三藏の弟子で恵果和尚の師に当る曇貞和尚。

※註記2…入室は、弟子入りすること。

※註記3…髻亂は、垂れ髪と齒の抜け替り＝幼児期。

※註記4…我が法教は、密教。

※註記5…妙蹟は、絶妙で奥深く広いこと。

※註記6…大佛頂は、『梵字大仏頂真言』（『大仏頂如来放光悉担多鉢但躍陀羅尼』）。

※註記7…大随求は、『梵字大随求真言』（『普遍光明清淨熾盛如意寶印心無能勝大明

王陀羅尼』）。

※註記8…普賢行は、『普賢行願讚』。

※註記9…文殊讚は、『文殊讚法身礼』。

※註記10…救蟻は、十四・五歳のこと。本生譚の救蟻捨身説による。

●本文・于時 代宗皇帝 聞之有勅迎入 命之曰 朕有疑滯 請爲決之 大師 則依法呼召 解紛如流 皇帝歎之曰 龍子雖少 能解下雨 斯言不虛 左右書紳 入瓶小師 于今見矣 從爾已還 驥駃迎送 四事不欽 年滿進具 孜孜照雪 三藏教海 波濤脣吻

書き下し・時に、代宗皇帝之を聞き勅有りて迎え入れ、之に命じて曰く。「朕、疑滯あり。

請う爲に之を決せ」。大師則ち法に依りて呼召し 紛 を解くこと流れるが如し。皇帝

之を歎じて曰く。「龍の子少なしと雖も能く下雨を解く。斯の言虚しからず。左右紳に

書せ。入瓶の小師、今に見えたり」。從爾已還、驥駃迎送し、四事欽けず。年進具に滿

ち、孜孜として雪を照らす。三藏の教海脣吻に波濤たり。

私訳・時に、(その時の皇帝)代宗がこれ(恵果和尚のこと)を聞き、勅命によって皇居に迎え入れ、恵果和尚に命じておっしゃるに「朕にはなかなか解決しない疑問があつて先に進めないことがあるのだが、これを解決してくれるように頼みたいのだ」と。すると大師(恵果)は念誦法によって摩醯首羅天(大自在天)を呼び招き、流れるが如くに

紛らわしいことをすばやく解決した。これに感歎した皇帝がおっしゃるに「龍王の子供は幼少の頃でも降る雨を解き放つ（と言うが、）この言葉はうそではなかった。近くに仕える者は、朝服の白い帯の余りに（それを）書くがよい。瓶にも入るような不思議な法力をもった若い僧侶を今目の当たりにした」と。それよりこのかた、（恵果和尚は）足の速い馬が送迎し、衣服・寝具・飲食物・薬に事欠くことがなかった。年令は具足戒に進む二十才に達し、一生懸命に書を読み勉強に励んだ。経・律・論の広く深い教えはくちびるを大きく波立たせた。

※註記1…疑滞は、なかなか解決しない疑問があつて先に進めないこと。

※註記2…法は、念誦法。摩醯首羅天法との註あり（『三教指歸 性靈集』岩波書店）。摩醯

首羅天はマヘーシュバラ (Mahesvara) で、ヒンドウのシヴァ神、仏教では大自在天。

※註記3…呼召は、大自在天を呼び召く。の意。

※註記4…紛は、この場合、まぎれること。まじり合うこと。入りまじって見わけにくいこと。判別がつかなくなること。

※註記5…下雨は、降る雨。

※註記6…左右は、そば近くに仕える者。

※註記7…紳は、中国の朝廷官人が身につける朝服の白い帯。端の余りは垂らして飾りにする。

※註記 8…入瓶は、瓶にも入るような不思議な法力をもった、の意。

※註記 9…小師は、幼い僧侶。

※註記 10…驥駮は、一日千里を駆ける足の速い馬。

※註記 11…四事は、衣服・臥具・飲食・湯薬。

※註記 12…進具は、具足戒に進む年令。二十才。

※註記 13…照雪は、中国の故事「螢雪の功」で有名な、東晋から南朝宋にかけての官吏・

孫康が、油がなくて灯りが灯せず、雪明りで読書をしたこと。

※註記 14…教海は、海のように広く深い教え。

※註記 15…脣吻は、くちびる。

●本文…五部觀鏡 照曜靈臺 洪鐘之響 隨機卷舒 空谷之應 逐器行藏 始則 四

分乘法 後則 三密灌頂 彌天辨鋒 不能交刃 灸輶智象 誰敢極底

書き下し…五部の觀鏡、靈臺に照曜す。洪鐘の響、機に隨い卷舒し、空谷の應じ、器に逐

つて行藏す。始は則ち四分を法に乗り、後は則ち三密灌頂なり。彌天の辨鋒は刃を交え

ること能わず、灸輶の智象も誰か敢えて底を極めん。

私訳・五部の観智（大円鏡智など五智）の鏡は（惠果和尚の）心魂の蓮台を照らし輝いた。大きな梵鐘の響きは（聞く人の）機根に従って伸縮し、ひと気のない谷の反響は（聞く人の）器量に応じて行きわたり隠れもする。（和尚は）始めは四分律を仏法とし、後には三密瑜伽と灌頂（を学ぶこと）だった。釈道安の弁舌は切っ先は、刃を交えることはできず、斉の淳于髡の弁舌・知謀も、誰が敢えて（和尚の器量の）底を極められようか。

※註記1…五部は、金剛界の五部。仏部・金剛部・宝生部・蓮華部・羯磨部。

※註記2…観鏡は、五部の五智を鏡に喩える。

※註記3…洪鐘は、大きな鐘。

※註記4…機は、機根、素質、器量、能力。

※註記5…卷舒は、伸縮、進退。

※註記6…空谷は、ひと気のない寂しい谷。

※註記7…行藏は、行きわたることと隠れること。

※註記8…四分は、四分律。

※註記9…彌天は、東晋の僧釈道安（仏図澄の弟子）のこと。道安が習鑿齒しゅうさくし（東晋時代の

歴史家・政治家）との会見で「弥天（空に遍き）釈道安」と言い、「四安（天下に聞えし）習鑿齒」と習鑿齒が応じた逸話から。

※註記10…辨鋒は、弁舌の切っ先。

※註記11…炙輶の智象は、車の油つぼ（輶）を炙ること。斉の威王に仕えた「稷下（しよくか）の学士」の一人の弁舌家・淳于髡（じゆんうこん）のこと。輶は車がきしまないための潤滑油を入れておく油つぼ。これを炙るとだんだん油は気化してなくなっていくのだが、淳于髡の弁舌・知謀は「いくら炙っても尽きることがない」という故事。
※註記12…底は、惠果和尚の器量の底、の意。

●本文…是故 三朝尊之 以爲國師 四衆禮之 以受灌頂 若乃 早魃焦葉 召那伽
以滂沱 商羊決堤 駟迦羅 以杲々矣 其感不移晷 其驗同在掌 皇帝皇后 崇其
增益 瓊枝玉葉 伏其降魔 斯乃 大師慈力之所致也 縱使 財帛接軫 田園比頃
有受无貯 不屑資生 或建大曼荼羅 或修僧伽藍處 濟貧以財 導愚以法 以不積
財爲心 以不慳法爲性

書き下し…是の故に、三朝は之を尊び以つて國師と爲し、四衆は之に禮して以つて灌
頂を受く。若し乃ち、早魃の葉を焦さば那伽ながを召まいて以つて滂沱ほうたし、商羊堤しょうようつつみを決
すれば迦羅からを駟まつて以つて杲々こうこうたらん。其の感かは晷けを移さず、其の驗げんは掌てに在るに

同じ。皇帝皇后は其の増益ぞうやくを崇び、瓊枝玉葉けいしぎよくようは其の降魔こうまに伏す。斯れ乃ち、大師の慈力の致す所なり。縦使たとえ、財帛さいはくの軫しんに接し田園けいの頃を比べるとも、受くること有るも貯えること無し。資生しせいを屑にせず、或いは大曼荼羅を建て、或いは僧伽藍處そうがらんしよを修す。貧を濟うに財を以てし、愚を導くに法を以てす。財を積まざるを以て心と爲し、法を慳おしまざるを以て性と爲す。

私訳…このようにして、代宗・徳宗・順宗の三代はこれ（惠果和尚）を尊重して皇帝の師（国師）とし、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は和尚に拝礼して灌頂を受けた。もしも、日照りが木々の葉を焦がすようであれば龍を招いて大雨を降らせ、雨が降りそうになると舞う鳥（＝大雨）が河の堤防を決壊させれば、神鳥ガルーダをかりたてて天空を明るくする。和尚の心の動きは日蔭を（求めてあちこちと）移動するようなことではなく、その功験は掌中にあるように自在である。皇帝や皇后も和尚の増益法を崇敬し、皇帝の一族は和尚の調伏法に平身低頭した。たとい、お金や絹物が次々と届き、田畑の面積を比べるようなことになっても、受取りはするが貯めなかった。生活用具をムダにせず、あるいは絵図のマンダラ（大曼荼羅）を建立し、あるいは寺院を修繕した。貧しい人を

救済するには金銭により、仏道に帰依しない人を導くには仏法を用いた。金銭を貯めないことを心とし、仏法を惜しまず用いることを本性とした。

※註記1…三朝は、代宗・徳宗・順宗の三代。

※註記2…四衆は、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷。

※註記3…那伽は、ナーガ (Naga)。龍。

※註記4…滂沱は、大雨をが降るさま。

※註記5…商羊は、雨が降りそうになると舞うという伝説上の鳥。

※註記6…迦羅は、ガルダ (Garuda)、金翅鳥。インド神話の鳥。

※註記7…杲々は、日の光の明るいさま。

※註記8…晷は、日蔭。

※註記9…驗は、功驗、靈驗。しるし。

米註記10…増益は、密教修法の一つの増益法。本尊の仏徳の利益倍増を祈る念誦法。

※註記10…瓊枝玉葉は、瓊が光り輝く玉で、枝・葉は子孫の喩え。皇帝以下その一族。

※註記11…降魔は、密教修法の一つの調伏法。本尊の仏徳によって仏道に帰依しない邪魔外道を降伏させ化導する念誦法。

※註記12…財帛は、お金と絹物。

※註記13…接軫は、軫が車の横木。車の横木にくつつくこと||次々と続くさま。

※註記14…頃は、田畑の面積。百畝。

※註記15…資生は、生活用具。

※註記16…大曼荼羅は、絵図で画かれた曼荼羅。

※註記17…僧伽藍處は、寺院。

●本文…故得 若尊若卑 虚往實歸 自近自遠 尋光集會矣 訶陵辨弘 經五天而接

足 新羅惠日 涉三韓而頂戴 劔南則惟上 河北則義圓 欽風振錫 渴法負笈

若復 印可紹構者 義明供奉其人也 不幸求車 滿公當之也 沐一子之顧 蒙三密

之教 則智瓌攻壹之徒 操敏堅通之輩 竝皆 入三昧耶 學瑜伽 持三祕密 達毘

鉢 或作一人師 或爲四衆依 法燈滿界 流派遍域 斯蓋 大師之法施也

書き下し…故に、若しは尊若しは卑、虚しく往いて實ちて歸る。近きより遠きより、光を

尋ねて集會しゅえすることを得たり。訶陵かりようの辨弘は五天を經て接足せつそくし、新羅の惠日は三韓を涉わた

つて頂戴す。劔南けんなんには則ち惟上いしやう、河北には則ち義圓ぎえん、風を欽うやまつて錫しゃくを振り、法むさほを渴ほつ

て笈おひを負う。若し復た、印可紹構いんかしやうこうせし者は、義明供奉ぎみようぐぶ其の人なり。不幸にして車を求

むるは満公まんこう之に當るなり。一子の顧かえりみに沐もくし、三密の教を蒙こうむるは則ち智瓌ちざんばい玫壹いちの徒ともから、操敏堅通之輩そうびんけんつうともから、竝んで皆、三昧耶さんまやに入り瑜伽を學び、三祕密さんひみつを持して毘鉢びはに達す。或

いは一人の師いちじんとなり、或いは四衆の依となる。法燈は界に満ち、流派は域に遍し。斯れ

蓋し大師だいしの法施ほうせなり。

私訳・故に、尊卑にかかわらず、何も期待せず往つてみたところ心満たされて歸る、と言うように、(国の内外から)遠近を問わず、光(惠果和尚)を尋ねて(多くの弟子が)集つてきた。ジャワ中部の辨弘は東方・西方・南方・北方・中央のいずれも涉獵して師の足元に頭をつけ、新羅の惠日は馬韓・弁韓・辰韓の三韓を歩きまわつて密法を受持し、昔の梁州(四川省)からは惟上(惟尚)、河北からは義圓が和尚の教風を敬つて求法の旅路につき、密法を渴望して笈(経卷や書物を入れる竹で編んだ背負い箱)を背負つた。あるいはまた、和尚から秘印秘明を伝授され構え(密法)を受け継ぐことになつた人は内供奉僧の義明その人であり、孔子の高弟・顔回が死んだ時、貧しさのあまり父の顔路が孔子の車で棺を作ってくれるよう請うたという故事は、(早逝した)義満がこれに當る。一子相伝の恩顧に浴して三密の法を授けられたのは義智・文瓌・義玫・義壹という

門弟、さらに義操・義敏・行堅・円通という同輩である、皆同様に三昧耶に入つて瑜伽（観法）を学修し、三密加持して毘鉢舍那（ヴィパシユヤナー、觀）に達す。（彼らが）或いは皇帝の師となり、或いは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の依り所となる。法灯は世界に満ち、法流は国内に遍満した。これは大師の仏法の施しである。

※註記1…虚往實歸

※註記2…尋光は、光が惠果和尚のこと。

※註記3…訶陵は、昔のジャワ島中部の国。訶陵という名はインドベンガル州のカリンガ

王国（羯餒伽）に由来するという。

※註記4…辨弘は、惠果和尚の弟子。

※註記5…五天は、東・西・南・北・中央。

※註記6…接足は、惠果和尚の足に頭をつけて拝礼すること。

※註記7…惠日、惠果和尚の弟子。

※註記8…三韓は、南朝鮮にあつた馬韓・弁韓・辰韓。

※註記9…頂戴は、密教を受法する、の意。

※註記10…劔南は、昔の梁州。現在の陝西省南部と四川省の大部分。

※註記11…惟上、惠果和尚の弟子、惟尚。

※註記12…義圓は、惠果和尚の高弟。

※註記13…義明は、恵果和尚の第一の高弟。

※註記14…供奉は、内供奉僧。宮中の内道場(国家鎮護を祈る密教祈祷道場)に奉仕する僧侶。

※註記15…求車は、孔子の高弟・顔回(顔淵)。清貧に甘んじ、早逝。顔回が死んだ時、貧しさのあまり、父の顔路が孔子の車で棺を作ってくれるように請うた、という故事(『論語』先進第十一)

※註記16…満公は、義満。恵果和尚の弟子。

※註記17…智璨、智壹は、義智・文璨・義攻・義叢・義壹。

※註記18…操敏堅通は、義操・義敏・行堅・円通。

※註記19…三昧耶は、密教で言うサマヤ(samayā)。灌頂を受け、曼荼羅壇で投華得仏し、その尊の秘印秘明を受持して不二一体(平等)になること。

※註記20…毘鉢は、毘鉢舍那(ヴィ・パシユヤナー(vipasyana))、止観の観。

※註記21…一人は、皇帝・天子。

●本文…從辭親就師 落飾入道 浮曩不借他 油鉢常自持 松竹堅其心 氷霜瑩其志
四儀不肅而成 三業不護而善 大師之尸羅 於此盡美矣 經寒經暑 不告其苦 遇
飢遇疾 其業不退 四上持念 四魔請降 十方結護 十軍面縛 能忍能勤 我師之
所不讓也 遊法界宮 觀胎藏之海會 入金剛界 禮遍智之麻集 百千陀羅尼 貫之

一心 萬德曼荼羅 布之一身 若行若坐 道場卽變 在眠在覺 觀智不離

書き下し…親を辭し師に就き、落飾して道に入りて従り、浮囊を他に借りず、油鉢を常に

自ら持す。松竹は其心を堅くし、氷霜は其志を瑩く。四儀は肅まずして成り、三業は

護らずして善し。大師の尸羅此に於いて美を盡す。寒を經暑を經るも其の苦を告げず、

飢に遇い疾に遇うも其の業を退かせず。四上し持念して四魔は降を請い、十方を結護

して十軍を面縛す。能く忍び能く勤む。我が師の譲らざる所なり。法界宮に遊び、胎藏

の海會を觀じ、金剛界に入り、遍智の麻集を禮す。百千の陀羅尼、之を一心に貫き、萬

德の曼荼羅、之を一身に布く。若しくは行じ若しくは坐し、道場卽ち變ず。眠りに在れ

ど覺りに在れど、觀と智は離れず。

私訳…親元を離れ師に師事し、剃髮して仏道に入つてより、持戒すること自ら堅く守り、
正念を常に自ら持した。節操はその心を堅固にし、清潔さはその志を磨いた。行・住・

坐・臥は慎ましくしなくても自ずから調い、身・口・意は過誤に気をつけなくとも正常だった。大師の戒律はここに至って讚美されるほどのものであった。寒い時も暑い時もその辛さを口にせず、空腹のときも病気の時も仏行をやめなかった。後夜・日中・初夜・夜半に上堂して念誦法を怠らず、煩惱魔・五蘊魔・死魔・天魔は降伏することを願い出、四方・四隅・上下の十方を結界し、欲・憂愁・飢渴・渴愛・睡眠・怖畏・疑悔・瞋恚・利養虚称・自高蔑人の十魔軍（煩惱）を捕縛した。よく忍耐しよく励むことは、我が師の誰にも負けぬところである。大日如来の宮殿に遊び（大日如来と一体になり）、胎藏界の諸尊の集りを観じ、金剛界に入って無数の（大日如来の）遍き智慧に拝礼をした。数え切れないほどの陀羅尼の誦持を一心腐乱に貫き、数え切れないほどの仏徳を具する曼荼羅を一身に置き換えた。もしくは行いもしくは坐り（行・住・坐・臥）、（すべての行いが密法の）道場となつて変現する。眠っている時でもサトリの境地に住している時でも、観想行とサトリの智慧が一致している。

※註記 1 .. 落飾は、剃髪して出家すること。

※註記 2 .. 浮囊は、浮き袋。持戒の喩え。

※註記 3 .. 油鉢は、正念。

※註記 4 .. 松竹は、冬に色を変えないことから節操の堅固なことの喩え。

※註記 5 .. 氷霜は、清浄なことの喩え。

※註記6…四儀は、行・住・坐・臥。

※註記7…三業は、身・口・意。

※註記8…尸羅は、戒律。

※註記9…四上は、後夜・日中・初夜・夜半に上堂し勤行すること。

※註記10…持念は、念誦法を怠らないこと。

※註記11…四魔は、煩惱魔・五蘊魔・死魔・天魔。

※註記12…結護は、結界。

※註記13…十軍は、『大智度論』卷十五に説かれる「十魔軍」。欲・憂愁・飢渴・渴愛・

睡眠・怖畏・疑悔・瞋恚・利養虚称・自高蔑人。

※註記14…面縛は、捕縛すること。

※註記15…法界宮は、サトリの世界の中心、すなわち大日如來の宮殿。

※註記16…海會は、サトリの智慧が集っている海。諸尊が集っている世界の喩え。界会。

※註記17…遍智は、大日如來の遍き智慧。

※註記18…麻集は、ゴマが集るさまのように無数に見えること。

※註記19…觀智は、觀（觀想行）とサトリの智慧。

●本文…是以 與朝日而驚長眠 將春雷以拔久蟄 我師之禪智 妙用在此乎 示榮貴
導榮貴 現有疾 待有疾 應病投藥 悲迷指南 常告門徒曰 人之貴者 不過國王
法之最者 不如密藏 策牛羊而趣道 久而始到 駕神通以跋涉 不勞而至 諸乘與
密藏 豈得同日而論乎 佛法之心隨 要妙斯在乎

書き下し…是を以つて 朝日を與にして長眠を驚かし、將た春雷は以つて久蟄を抜く。

我師の禪智、妙用此に在らん。榮貴を示して榮貴を導き、有疾を現じて有疾を待つ。病に應じて投藥し、迷いを悲しんで指南す。常に門徒に告げて曰く。「人の貴きは國王に過ぎず、法の最たるは密藏に如かず。牛羊に策して道に趣き、久しくして始めて到る。

神通を駕とし以つて跋涉し、勞せずして至る。諸乘を密藏と豈同日に論ずるを得んや。

佛法の心隨、要妙斯に在らん。

私訳…こうして、朝日が昇るとともに朝寝坊（煩惱）を驚かし、また春雷は長く冬ごもりしている虫の度肝を抜く。我が師の三密瑜伽による智慧のすぐれた効用がここにある。財産や地位を示し、それを求める者は財産や地位に導き、病人に實際なり病人を待った。

病気に応じて薬を与え、迷いを悲しんで解決の道を教えた。常に弟子たちに（次のように）告げて言った。「人の尊さは国王に過ぎるものはない。仏法で最もすぐれているのは密教である。牛（菩薩乗）や羊（声聞乗）を叱咤激励して仏道に専念し、長く励んで始めてサトリに至るのだ。神通力を乗り物として山や川を涉猟し、苦もなくサトリに至った。仏教の諸宗の教えと密教をはたして同日に論じることができようか」と。仏法の心髄、すなわち肝心なところはここにあるのである。

※註記1…長眠は、朝寝坊。煩惱の喩え。

※註記2…久蟄は、長く冬ごもりしている虫。

※註記3…榮貴は、財産と身分・地位。

※註記4…有疾は、病人。

※註記5…牛羊は、牛が菩薩乗、羊が声聞乗の喩え。

※註記6…神通は、仏教で言う仏・菩薩が持っている超自然的な能力。六神通（神足通・

天目通・他心通・宿命通・天眼通・漏尽通）。観想行によつて生じる。

※註記7…要妙は、要諦。肝心なもの。

●本文…無畏三蔵 脱躡王位 金剛親教 浮盃來傳 豈徒然哉 從金剛薩埵 稽首扣
寂 師々相傳 于今七葉矣 非冒地之難得 遇此法之不易也 是故 建胎藏之大壇

開灌頂之甘露 所期 若天若鬼 觀尊儀而洗垢 或男或女 嘗法味而蘊珠 一尊一契 證道之徑路 一字一句 入佛之父母者也 汝等 勉之々々 我師之勸誘 妙趣在茲也 夫一明一暗 天之常也 乍現乍歿 聖之權也 常理寡尤 權道多益

書き下し・無畏三藏王位を脱躑し、金剛の親教益を浮べて來たり傳わる。豈徒然ならんや。

金剛薩埵、稽首して寂を叩いて従り、師々相傳して今にして七葉。冒地の得難きに非ず、此の法に遇うこと易からざるなり。是の故に、胎藏の大壇を建て、灌頂の甘露を開く。

期する所は、若しくは天、若しくは鬼、尊儀を觀て洗垢し、或いは男、或いは女、法味を嘗めて珠を蘊む。一尊一契は證道の徑路、一字一句は入佛の父母たる者なり。汝等、之を勉めよ、之を勉めよ」と。我が師の勸誘の妙趣は茲に在るなり。夫れ、一たび明らかに一たび暗きは天の常なり。乍ち現われ乍ち歿するは聖の權なり。常理は尤寡く權道は益多し。

私訳・善無畏三藏は王位を未練なく捨て、金剛智三藏の密教は船を浮かべて來たり、(『金

『剛頂經』系の密教が) 伝わった。ただそれだけではない。金剛薩埵が頭を地につけて拝礼し寂靜(サトリの境地)をたずねてから、師から師へ密法を継いで現在までで七代。サトリが得難いわけではなく、この密法に遭うことが難しいのである。であるからして、胎藏界の大(曼荼羅)壇を建立し、灌頂の甘露の法水を(受者の)頭頂に注いだ。その目的は、天龍にしても鬼神にしても胎藏界の諸尊像を見て心の垢を洗い、男でも女でも密法の妙味をなめて菩提心を積みたくわえるのである。一仏尊とその一印契はサトリへの直路であり、一字の種字一句の真言は本尊との入我我入の父母である。お前たちは、この法を勉めなさい、この法を勉めなさい」と。わが師の勧めの妙味はここにあるのだ。それ、昼は明るくなり夜が暗くなるのは自然の常である。たちまちに現われたたちまちに消えてなくなるのは仏の仮の方法(方便)である。不変の真理には過誤が少なく、方便の道には利益が多いのである。

※註記1..無畏三藏は、『大日經』の漢訳や『大日經疏』の講義者で知られる善無畏三藏。

※註記2..脱躡は、わらぐつを脱ぐ。すなわち、大事なものを未練なく捨てること。

※註記3..金剛親教は、『金剛頂經』を中国にもたらした金剛智三藏の密教。

※註記4..盃は、船の数え方の杯に通じ、船の喩え。

※註記5..徒然は、ただそれだけ、漫然、の異。

※註記6..稽首は、頭を地につけて拝礼すること。

- ※註記7.. 扣寂は、寂靜（サトリの境地）をたずねること。
- ※註記8.. 師々相傳は、師から師へ法を伝え継ぐこと。
- ※註記9.. 七葉は、葉は世・代。七代。
大日如来↓金剛薩埵↓龍猛↓龍智↓金剛智↓不空↓惠果。
- ※註記10.. 冒地は、ボウジ (bodhi)、菩提・サトリ。
- ※註記11.. 尊儀は、胎藏曼荼羅の諸尊。
- ※註記12.. 法味は、密法の妙味。
- ※註記13.. 珠は、菩提心の喩え。
- ※註記14.. 蘊は、積みたくわえる。
- ※註記15.. 契は、契印、印相、印。
- ※註記16.. 證道は、サトリ。
- ※註記17.. 入佛は、入我我入。
- ※註記18.. 勧誘は、勧め。
- ※註記19.. 權は、仮の姿、方便。
- ※註記20.. 常理は、不変の真理。
- ※註記21.. 尤は、咎、過誤、過ち。
- ※註記22.. 權道は、方便の道。

●本文…遂乃 以永貞元年歲在乙酉極寒月滿 住世六十 僧夏四十 結法印而攝念
示人間以薪盡矣 嗚呼哀哉 天返歲星 人失惠日 筏歸彼岸 溺子一何悲哉 醫王
匿迹 狂兒馮誰解毒 嗟呼痛哉 簡日於建寅之十七 卜瑩于城邨之九泉 斷腸埋玉
爛肝燒芝

書き下し…遂いに乃ち、永貞元年、歲乙酉に在りし極寒の月滿ちるを以て、世に住むこと

六十、僧夏四十、法印を結んで攝念し、人間に示すに薪の盡くることを以てす。嗚呼、

哀しいかな。天は歲星を返し。人は惠日を失い、筏は彼岸に歸る。溺子一何ぞ悲しまん

や。醫王は迹を匿し、狂兒は誰に馮りて毒を解せん。嗟呼痛ましいかな。日を建寅の十

七に簡び、瑩を城邨の九泉に卜す。腸を斷つて玉を埋め、肝を爛して芝を燒く。

私訳…とうとう、永貞元年（八〇五）、乙酉の歲、十二月十五日、世壽六十才、僧侶と
して四十年、胎藏界大日の法界定印を結び（大日如来の）觀想行に集中し、人々に
薪（煩惱）が燃え尽きる（無余涅槃に入る）のを示した。あゝ何と哀しいことか。
天は和尚の吉星（吉運）を戻し、人は智慧の輝きを失い、衆生を救済する（方便の）

筏（和尚）はサトリの世界（彼岸）に帰った。煩惱の海に溺れる衆生はどうしてただ一人で悲しむだろうか。（応病与薬の）医王（和尚）はその足跡を隠し（遷化し）、迷いの世界に残された子たち（弟子たち）は誰を頼りにして（病毒⇨煩惱）を解毒すればいいのだろうか。あゝ、痛ましいかな。（然るところ）明けて正月の十七日を選び、卜占して長安北方の墳墓地の泉下に墓を定め、断腸の思いで和尚（の亡骸）を埋め、（火の熱で）肝がただれる思いをして火葬した。

※註記1…永貞元年は、八〇五年、順宗の世。

※註記2…乙酉は、きのととり。

※註記3…極寒は、十二月。

※註記4…月滿は、満月⇨十五日。

※註記5…僧夏は、夏が一年に一度の夏安居で一年、の意。

※註記6…法印は、胎藏界大日の法界定印。

※註記7…攝念は、正念に集中すること。

※註記8…薪盡は、薪が煩惱で、煩惱（生命欲）が尽きること⇨無余涅槃。

※註記9…歳星は、木星のこと。中国では、「十二次」を司る最も尊い星。吉星・幸運星。

道教では神格化された天形星。

※註記10…恵日は、智慧の輝き。

※註記 1 1 .. 筏は、彼岸に渡る筏。六波羅蜜や方便行を言う。ここは方便（衆生救済）の筏 || 恵果和尚。

※註記 1 2 .. 溺子は、煩惱の海に溺れる衆生。

※註記 1 3 .. 醫王は、恵果和尚のこと。

※註記 1 4 .. 匿迹は、足跡を隠すこと。遷化。

※註記 1 5 .. 狂兒は、迷いの世界の子供。弟子たちのこと。

※註記 1 6 .. 毒は、貪・瞋・痴の三毒。

※註記 1 7 .. 建寅は、正月、一月。

※註記 1 8 .. 塋は、墓。

※註記 1 9 .. 城邸は、長安北方の墳墓地。

※註記 2 0 .. 九泉は、幾重にも重なった地の底 || 泉下・黄泉・冥土。

※註記 2 1 .. トは、卜占。占って決める。

※註記 2 2 .. 玉は、恵果和尚の喩え。

※註記 2 3 .. 芝は、恵果和尚の喩え。

● 本文 .. 泉扉永閉 愬天不及 荼蓼嗚咽 吞火不滅 天雲黪々 現悲色 松風瑟瑟 含哀聲 庭
際 菘竹葉如故 隴頭松檟根新移 烏光激廻 恨情切 蟾影斡轉 攀擗新 嗟呼痛哉 奈
苦何 弟子空海 顧桑梓 則東海之東 想行李 則難中之難 波濤萬々 雲山幾千

也 來非我力 歸非我志 招我以鈎 引我以索 泛舶之朝 數示異相 歸帆之夕
縷説宿縁

書き下し…泉扉永く閉じ、天に翹るに及ばず。茶蓼に嗚咽し、火を吞んで滅せず。天雲

は黪々として悲色を現し、松風は瑟瑟として哀聲を含む。庭際の葦竹、葉は故の如く、

隴頭の松檜は根を新たに移す。鳥光は激廻して恨情切なり、蟾影は幹轉して攀擗新なり。

嗟呼痛ましいかな。苦しきを奈何や。弟子空海、桑梓を顧りみれば、則ち東海の東、

行李を想えば、則ち難中の難なり。波濤萬々、雲山幾千なり。來れるは非我が力に非ず、

歸るも我が志に非ず。我を招くに鈎を以てし、我を引くに索を以てす。舶を泛たるの

朝、數異相を示す。帆を歸すの夕、宿縁を縷説す。

私訳…泉下の扉は永く閉り、（開けてくれと）天に訴えても仕方なく、和尚の死に嗚咽して苦しみを飲み込んでも（苦しみは）消滅しない。天の雲は青黒くなって悲しみの色を

現わし、松風は寂しく吹いて哀しみの声を含んでいる。庭先の緑の竹はいつものように葉を緑色に繁らせ、丘に上のお墓の木は新たに移植したものである。日輪（太陽 日中の時間）はさつさと廻って（時の経つ速さに）うらめしさが募り、月輪（月 夜の時間）は転がるように速く、誰かにすがり胸を打って悲しむことのくり返しである。あゝ、痛ましいかな。この苦しさはどうしようもない。弟子空海は、故郷をふりかえってみれば東海の東、荷物籠を考えれば至難のことだった。東シナ海の大波は長く、上陸後の雲や山は数え切れなかった。ここまで来られたのは私の力ではなく、帰れるのも私の意志の力ではない。私を唐に引き引いてくれたのは和尚が、金剛鉤・金剛索・金剛鎖・金剛鈴の四摂菩薩のように、鉤と索を以てしてくれたからである。乗船した遣唐使船が出港した朝、しばしば不思議な吉兆現象があった。船を帰す夕、前世からずっと私を知っていたという因縁話を詳しく説いてくれた。

※註記1 .. 泉扉は、黄泉の入口の扉。泉下。

※註記2 .. 荼蓼は、茶が苦菜（にがな）、蓼がタデ。どちらも苦く辛いことの喩え。転じて尊敬する人の死。

※註記3 .. 火は、苦いことの喩え。

※註記4 .. 黦々は、薄青黒いさま。

※註記5 .. 瑟瑟は、風が寂しく吹くさま。

※註記6…葦竹は、青竹。

※註記7…隴頭は、丘の上。

※註記8…松檟は、松とキササゲ。ともにお墓に植えられるためお墓の木、の意。

※註記9…烏光は、月（月輪）のヒキガエルと太陽（日輪）の烏の喩え。

※註記10…蟾影は、月（月輪）のヒキガエル。

※註記11…攀擗は、攀は誰かにすがりつくこと。擗は胸を打って悲しむこと。

※註記12…桑梓は、桑と梓。中国で、家ごとに桑と梓を垣下に植え、子孫に残して養蚕と器具用とに供したことから、この木を見れば父母を思う、という意味。転じて故郷。

※註記13…行李は、柳や竹や藤で編んだ物入れの籠。

※註記14…宿縁は、前世から恵果和尚が空海を知っていたという因縁話。

※註記15…縷説は、詳しく説く。

●本文…和尚掩色之夜 於境界中 告弟子曰 汝未知 吾與汝 宿契之深乎 多生之

中 相共誓願 弘演密藏 彼此代 爲師資 非只一兩度也 是故 勸汝遠涉 授我

深法 受法云畢 吾願足矣 汝西土也接我足 吾也東生入汝之室 莫久遲留 吾在

前去也 竊顧此言 進退非我能 去留隨我師 孔宣雖泥怪異之説 而妙幢説金鼓之

夢 所以 舉一隅示同門者也 詞徹骨髓 誨切心肝 一喜一悲 胸裂腸斷 欲罷不

能 豈敢韞默 雖馮我師之德廣 還恐 斯言之墮地 歎彼山海之易變 懸之日月之

不朽 乃作銘曰

書き下し…和尚掩色えんしよくの夜、境界の中において、弟子に告げて曰のたまわく。汝未だ知らず。吾と汝と宿契の深きことを。多生の中、相共に誓願し弘く密藏のを演かなたぶ。彼こゝに此に代りて師資爲たるは、ただ一兩度に非らざるなり。是の故に、汝に遠く涉わたることを勧め、我が深法を授け、受法こゝ云おわに畢おわんぬ。吾が願いは足りぬ。汝は西土にして我が足に接す。吾は東に生れ汝の室に入らん。久しく遲留ちりゆうすること莫なかれ、吾前に在つて去らん」と。竊ひそかに此の言を顧かえりみるに、進退我が能くするに非ず。去留我が師に隨う。孔宣こうせんは怪異の説に泥むと雖も、妙幢みょうとうは金鼓の夢を説く。所以ゆえんは、一隅を擧げて示同門に示す者なり。詞骨髓こしほに徹おしえし誨おしえ心肝に切なり。一たび喜び一たび悲しむ。胸は裂け腸を斷ち、罷やむことを欲して能わず、

豈敢あにえて韞默うんもくせん。我が師の徳廣きに馮よると雖も還つて恐る。斯の言の地に墮ちんことを。彼の山海の變じ易きことを歎じ、之を日月の不朽に懸かけん。乃ち銘を作つて曰く。

私訳・和尚が遷化された夜、幽冥の境において、和尚が弟子に告げて言われた。「汝は、私と汝との前世からの契りが深いことを、未だ知らない。生まれ変わりのなかで、共に誓い密教弘法のために密法を説いた。彼方にもここにも代わる代わる、師僧と弟子でいることは一度や二度ではない。だから、お前にも遠く唐に渡つてくることを勧め、わが深き法を授け、受法はもう終わっている。私の願いはもう充分達せられた。お前は唐土にきて私の足に接してくれた（私に稽首頂礼してくれた）。（今度は）私が日本に生れようもう行こうと思う」と。

密かにこのお言葉を顧みるに、進退は私が決めるのではなく、去るも留まるもわが師に従うのだ。孔子（『論語』）は、君子は不可思議なことは口にしないと（世俗の道徳ばかり）言つて（神秘的なことには）ふんぎりがつかないようであるが、（和尚に教えられた）『金光明最勝王経』には、妙幢菩薩（地藏菩薩）は婆羅門仙が金の鼓を打ち鳴らしたのを聞いて、その音が懺悔の教えに聞こえたところ誉められた、という夢（夢譚）を見たこと（神秘体験）が説かれている。そのわけは、一つの考えを

挙げてそれを他の同門の弟子にも示すことなのである。師の言葉は心の底に深く染み入り、その教えは肝に刻み込むものなのである。(こうして、和尚の遺言を思い出せば) 悲喜こもごもで、胸は裂け腸は破れ、それが止むことを願っても止まず、それをどうして敢えて隠し黙っていられるだろうか。わが師の徳の広さによるお言葉なのに、返ってこのお言葉が地に堕ちることを恐れるのである。かの山や海が変わりやすいことを歎き、これを(和尚のお言葉を)日月のように朽ちないものに託したいと思う。そこで、銘文を作つて言うに、

※註記1..掩色は、白毫の色を隠す|| 釈尊の涅槃、高僧の死。『俱舍論』に、「青蓮罷笑白毫掩色」とあるによる。

※註記2..境界は、生と死の境。幽冥の境。

※註記3..多生は、生まれ変わり。

※註記4..孔宣は、孔子。

※註記5..泥は、こだわる、なずむ、ふんぎりがつかない。

※註記6..妙幢は、妙幢菩薩(地藏菩薩の異名)がバラモンの金鼓を打った夢を見た、と

いう『金光明最勝王経』(夢見金鼓懺悔品)に由来する故事。

※註記7..韞黙は、隠し黙っていること。

●本文…生也無邊 行願莫極 麗天臨水 分影萬德

爰有挺生 人形佛識 毘尼密藏 吞并餘力

修多與論 牢籠胸臆 四分乘法 三密加持

國師三代 萬類依之 下雨止雨 不日即時

所化緣盡 怕焉歸眞 惠炬已滅 法雷何春

梁木摧矣 痛哉苦哉 松檟封閉 何劫更開

書き下し…生は也無邊にして行願極まることなし。天に麗り水に臨んで影を萬德に分つ。

爰に生を挺くもの有り人の形して佛の識あり。毘尼と密藏と呑み并わせ餘力あり。

修多と論と胸臆に牢籠す。四分を法に乗り三密加持す。

國師たること三代、萬類之に依る。雨を下し雨を止む、日ならずして即時たり。

所化の緣盡き怕焉として眞に歸る。惠炬已に滅し法雷何れの春か。

梁木摧け、痛ましいかな、苦しいかな。松檟封閉して何れの劫にか更に開かん。

私訳・生類（衆生）は限りがなく、慈悲の行によって衆生を救度しようとする願いは尽きない。仏法に連なり、衆生済度に臨んでは数限りない衆生の心に応じるのである。

ここに生類を抜きん出るものあって、人間ながら仏智がある。律蔵と密法を身につけ、それでも余力がある。経蔵と論蔵を胸のなかに取り込んで自由に操り、四分律を遵奉して三密瑜伽を修する。三代の皇帝（代宗・徳宗・順宗）の師であり、生きとし生けるものは皆この人を頼る。（不可思議な靈験によって、早魃や多雨の時には人々のために）雨を降らせたり雨を止めたり、それも日数を措かずぐにである。（然るところ、和尚が化導する）弟子やその他の人々との縁が尽きて、静かに阿字のふるさとに帰られた。智慧の火はすでに消滅し、春雷に似た密法の轟は何時の春のことだろうか。国の梁木が砕けてしまい、痛ましいかな、苦しいかな。お墓に植えた木は（次第に生い茂り、和尚の姿を）隠すように封じ込めそう、限らない時間のいつまた開くことになるのだろう。

※註記 1 .. 行願は、慈悲の行によって衆生を救度しようとする願い。

※註記 2 .. 天は、日月の意であるが、ここは不朽の教え Ⅱ 仏法。

※註記 3 .. 水は、人々のノドの渴きをうるおす意味で、衆生済度。

※註記 4 .. 分影は、衆生の心に応じて済度する、の意。

※註記 5 .. 挺生は、挺が抜きんでる、ずば抜けた、の意。生は生類。

※註記 6 .. 識は、覚識、サトリの智慧。

※註記7…毘尼は、ヴィナヤ (vinaya)、律藏。

※註記8…修多は、修多羅、スートラ (sūtra)、經 (藏)。

※註記9…論は、シャーストラ (śāstra)、論藏。

※註記10…牢籠は、取り込むこと、自分のものして自由に操ること。

※註記11…四分は、『四分律』。もともと部派仏教の法藏部が伝持した律藏。日本には

鑑真和尚がもたらし東大寺の戒壇で伝えた。入唐直前の空海も東大寺で受戒している。南都六宗の律宗 (唐招提寺) に受け継がれている。比丘の二五〇戒 (初戒)、比丘尼の三三八戒と受戒・説戒・安居・自恣 (第二分)、自恣の補足の皮革・衣・薬・迦絺那衣 (かちなえ、雨安居のあとに布施された布で作る衣) など十四戒 (第三分)、房舎・雜の二戒と集法比丘五百人・七百集法毘尼・調部・毘尼増一 (第四分)。

※註記12…國師は、皇帝の師。

※註記13…所化は、和尚が化導する弟子やその他の人々。

※註記14…怕焉は、怕が静か・心が安らか、の意。焉が状態を表す語に添える助字。

※註記15…眞は、眞実の世界、サトリの世界。阿字のふるさと。

※註記16…恵炬は、智慧の灯火。

※註記17…法雷は、春雷が土のなかの虫などを目覚めさせることに喩えて、密法の雷鳴 (教え) で人々を目覚めさせること。

※註記18…梁木は、家屋構造材の梁 (はり)。ここは、国家の梁たる人、の意。

※註記19..松檜は、松とキササギ。お墓に植えられた木。

※註記20..封閉は..お墓に植えられた木(の葉)が(生い茂って)和尚を隠し封じ込めているように、の意。